

ドイツ文学わき道散歩(16)

10年ほど前、皇妃エリーザベトの物語がミュージカルの題材になり話題を呼んだことがあった。エリーザベトとはハプスブルク家の皇帝フランツ・ヨーゼフに嫁いだ皇妃で、美しい容姿と波瀾に満ちた生涯が有名である。“エリザベート”といったほうが一般に知られているかもしれないが当時ドイツ語学科のある先生が「あれはドイツ語の読みかたでは“エリザベート”ではなく、“エリーザベト”と読むべきだ」と仰っていたことが記憶に残る。印象深いものがもうひとつ。

ある朝目覚めると巨大な一匹の虫になっていた男の話と聞いてすぐにピンとくる方は、主人公の名前を覚えておられるだろうか。フランツ・カフカ作『変身』で岩波文庫では“グレゴール・ザムザ”と記述されている主人公の名が、新潮文庫の改版では“グレーゴル・ザムザ”になっている。人名はなるべくオリジナルの読みかたに準ずる翻訳傾向のためであろう。しかしながら、長音の箇所がひとつ動いただけにも拘らず、何とも言えない違和感を覚えたのは、おそらく個人的なカフカ読書体験に起因している。『変身』に出会ったのは今から20年近く前のことだが、通して読み終えることが出来たのは10年前である。読み始めた頃の“グレゴール”との付き合いが長過ぎて、それがすっかり定着してしまった。短い小説の読了に何故そまでの期間を費やしたのか。とどのつまりは「因果応報」や「勸善懲惡」の概念に知らず知らずの内どっぷりと浸かっていた小娘には耐えられなかったのである。突如として現れた闇に目が慣れるまでは長い時間を要するように。

カフカの作品を読み解く上で欠くことの出来ないキーワードは「不条理」だと言われている。主人公が虫になった理由は書かれていない。「虫ってどういうこと??」という読者の衝撃をよそに、話はどんどん進む。物語の中で変わったものは主人公の姿だけではない。一家の稼ぎ頭が突然一家のお荷物になった状況を受け入れていく家族の心情こそが„Die Verwandlung” (変身)。いまやおぞましい虫であるグレーゴルの姿よりも、怖いものは何か。また、そういった表面的な怖さにもまして、カフカの迷宮に入り込むと、いつの間にかグレーゴルの変身を受け入れる精神状態に陥った自分への怖さがある。

ちなみに村上春樹の小説『海辺のカフカ』のカフカ少年は、フランツ・カフカではない。しかし、村上作品を読んでいると時折現実に戻って来られない感が湧く所が、読書体験としてのカフカ読後と少し似ていると感じずにはいられない。「ドイツ文学は苦手」と思っている読者の方の中に村上春樹ファンがいるならば、是非一度カフカを読んでみていただきたい。思いがけずドイツ文学の扉は開かれている。

さて、さしたる理由もなく人間が不幸になっていく“カフカの”展開にはどうしても後味の悪さが残るという方には、疑問点が伏線だったと気付いた途端、数珠繋ぎに話が見えてくる物語をご紹介します。結果に対して、スッキリするほど原因がある。けれどもそれは別のお話、作者が元々はミステリ作家だと聞いて納得のベストセラー小説については、またの機会に。